｢構えない｣普段着の防災 危機管理アドバイザー国崎さん

TOKYO 次代の案内人

#東京 #関東 #災害・気象

2023/1/10 5:00 [有料会員限定]

主宰する危機管理教育研究所の防災用ベストは「普段から外出用として使用できるデザイン」とした

「生活者目線で危険回避のノウハウを伝える」。危機管理アドバイザー国崎信江さんのモットーだ。とりわけ行政主導になりがちな防災について、わかりやすい言葉で伝えることを心がける。関東大震災から100年。ことさら災害に構えない「普段着の防災」の重要性を国や行政、幼稚園、学校などで訴え続ける。

きっかけは1995年の阪神大震災。その年に子供を授かった。住んでいた横浜は神戸と似た町で、守るべき家族のことを考える主婦が何の知識もなかった災害に関心を奪われた。それから毎日のように図書館に通い防災に関する書籍を読みふけった。

生活上のノウハウから、長周期地震動といった地球物理学に及ぶ分野にも手を広げ数百冊を読破。そこで疑問が湧く。あのすさまじい災禍から命を守るのは、単に防災用品を準備するだけでいいのか。「守るべき命は普段の生活により深くリンクしている」という生活者目線に気づく。

例えば「強い揺れが来たら机の下へ」という心構えも、つぶれない机の強度はどうか、なぜもぐるのかから考える。独自のスタンスを一つ一つまとめ上げてできた「国崎家の防災マニュアル」は家族が驚くほどのファイルの厚さに。それを出版社に持って行ったところ「女性の視点」が受け入れられ、危機管理のプロとしての活動が始まった。

関東大震災についても単なる史実とは思えない。避難する人の家財道具が火災の導火線となったが、今はガソリンを積んだ車が列をなす。混乱の中で朝鮮人虐殺につながった心ないデマも、現代ではSNS（交流サイト）による拡散というリスクをはらむ。

火災の関東、建物倒壊の阪神、津波の東日本――。巨大災害は次々と新たな危険を浮き彫りにした。次は「人が人の命を奪う」災害とみる。避難所に入りきらない人の医療・物資の不足、道路にあふれる車に遮られる帰宅困難者。人が群衆と化した時に様々な危険が生まれる。

3人の子供を育てた母として、常に考えるのは「防災の常識」と実際とのズレ。災害時も日常に近い生活をいかに継続できるかが備えの基本だ。自宅で安全なら避難所に行く必要はない。アレルギーを持つ子供など、親が配給に頼らず普段の食べ物を用意する知恵と備え。「大切なのは『自分はどうするのか』考えること」。災害から学ぶ思いは変わらない。（和佐徹哉）

関東大震災から100年、次の世代に伝える

死者・行方不明者が約10万5000人に上った関東大震災から2023年9月1日で100年を迎える。人口密集地を襲った最大震度7の激震は、昼食の支度を進める家庭の煮炊き用の火が燃え広がり、史上最悪の自然災害をもたらした。

死者のうち9万2000人が火災による犠牲者で、東京・本所にあった軍服工場跡地の陸軍被服廠（しょう）跡では、避難してきた人が運び込んだ家財道具や大八車に次々と引火。折からの台風による強風も加わり炎が竜巻状に燃え上がる火災旋風が発生、3万8000人以上が命を失った。

陸軍被服廠跡の横網町公園に建つ東京都慰霊堂。震災の犠牲者約5万8000人の遺骨を納める（東京都墨田区）

現場の一部は東京都立横網町公園として整備され、園内にある東京都復興記念館では写真や焼けた遺品など当時の悲惨な状況を伝える資料を展示している。

記念館を運営する東京都慰霊協会は所蔵する約5000点に及ぶ当時の写真資料などのデジタル化を進めており、8月末までに一部改修する記念館で公開する。同協会は「多くの犠牲者を生み出した教訓や反省の資料として、次の100年に伝えたい」としている。